

三重県電気工業工業組合
三重県電気工事協力会
発行人 角谷利夫
編集責任 広報委員

新年を迎えて

三重県電気工業工業組合理事長
三重県電気工事協力会会長 角谷利夫



皆さん、ご健勝で迎春、心からおよろこび申し上げます。

「光陰、矢の如し」とは正にその語意の通りで今年もこうして新しい年を迎えました。

さて去年は来る日も来る日も円高が引き起した多くの出来事が世界中を駆け巡り大きな傷跡を残して暮れました。国の内外を問わず貿易摩擦が生じその大きな

流動は、その昔、日本の繁栄を双肩に背負ってきた、石炭、鉄鋼、造船など我が国の基幹産業が急速に斜傾化が進みその生存すら問われる中、これらの産業と百

有余年に亘り苦業を共にして来た国鉄も再建の方策尽き膨大な累積赤字を残したまま解体、遂に分割、民営の改革の道が決まりました。

このように我が国の基幹産業が根底から崩れるにつれ数多くの関連業種が次々と運命を共にする様相は誠に目を覆うものがあります。

ところが、こうした中にも我が国を代表する電気、電子工学や生命工学の驚異

的な進展はいろいろの分野で新技術が開発されその波瀾は生産体系や物流機構をも革新し、これまた、産業、企業の明暗を分ける勢いです。吾々素人にはこの大きな流れの行方や、影響はとても予知することができませんが、何はともあれ吾々の業界に新しい市場が開かれることを期待したいものです。と同時に、この大きな奔流に押し流されて行く中にも、自ら積極的に勉強して、自分なりに事象を冷静に判断して行くことが最も大事なことだと思います。

また、今一つ、よくよく考えなければならぬ点は、吾々の業態です。吾々電気工業業はその取り扱う総べての資材、器具が完成品でその製品を如何に機能的に需要場所に組立てるか

た数限りなく多機能かつ省力的な製品が次々に開発され需要の消化に随分と歓迎されたものです。ところがよくよく考えて見るとこうした多便的な資材や器具は知らず知らずのうちに吾々の工量を吸収して来たのです。ましてや近年の景気の影響も大きな要因ではあるがこの工量の減少を補う手立ては今こそ工屋から脱皮し真の技術経営に転換する重大な時期ではないでしょうか。更に吾々工業業者は一貫して生産の一面のみを追求する経営理念が基本的にその理念は勿論否定するものではありませんが、然し、物は造るばかりでは世の中は成り立ちません。その造った物を惜みなく手入れをし、更に傷んだ個所は十分な手当をしてその物の与えられた社会的使命を助長することがどんなに大事なことかを今一度考えようではありませんか、このことは吾々工業業にとつては言はずもがなメンテナンス

要に迫られ、当時はこれま

(一ページよりつづく)
 の分野で、この具体的な手段が保守管理業務です。この業務の評価は様々で大半の人が消極的な意見を持っているのも事実ですが、私は、一見非常に非生産的な業務と考えられるこの業務こそが累積されて新しい需要を開拓して来たことを見落しているのではないかと考えます。従来奉仕的に顧客に仕えることのみが唯一のサービスと考え勝てたが唯単にこの奉仕を有料化するとどう考へ方は余りに

も単純で、この奉仕の本当の価値は何かを追求すべきです。また吾々の業界はいろいろの資格の取得には熱心ですが、さて一度手に入れた資格や技術の活用には欠けることです。繰り返して言います。量的には期待できない需要です。この貴重な需要を如何に高度な付加価値を増幅するかがこれからの時代を生き残る唯一の途です。このほか厳しい利潤追求をするには下請条件の改善や分割発注の促進も重要な課題ですし、士

法・業法の改正問題、更に施行管理技士制度の進展等々幾多の重要な問題が山積しております。
 どれを取っても吾々の手で解決して行くほかありません。それには皆さん一人一人がその重要性を十分理解され誰もが惜みなく智恵と力を出し合い持ち寄ってお互の共存を願ひ、強いては胸を張って次の世代にバトンタッチのできる業界の明日を創ろうではありませんか。

新年に思う

広報委員長 青山 登志男

一九八七年の新春を迎え組合員皆さまのご健勝を心からお祝い申し上げます。
 一昨年・昨年と続く不況の現実を踏まえ、好景気は遠のいた遙かな夢と割り切り、更に厳しい一年への決意を新たにしております。

そのためにも、ここ数年前のように仕事さえすれば儲かった時代の夢を捨て、新しい分野の開拓、保守管理業務の推進等々また経費の節減もさることながら、従来のようなドンブリ勘定ではなく、正確な積算による、正当な利潤を得るよう努力し、いたずらなダビングを避けるよう組合員の一段の結束と相互信頼のもとに共存共栄を願うもの一人です。私も現在組合の広報委員長の重責を仰せつかっていますが、組合の事業運営には、組合員皆さまのエネルギー源となるような広報活動をと、微力ながら努力してるところであります。

たほどの変化も無く、それに連動しての日本の将来予想もこれ以下に極端に悪化の心配は当分なさそうですので、従来と大略同様の低成長型予算の編成をとお考えしております。

どうか会報紙を通じて、組合員お互いの暖かい心のふれ合いの場となるよう、皆さまからの積極的なご協力を切にお願い申し上げます。

謹賀新年

(社)東海電友共済会

理事長 池戸正巳

新年明けまして御目出と
 うございます。

この間色々な検討課題も
 出て参りましたので早速運

たはどの変化も無く、それ
 に連動しての日本の将来予

旧年中は各県各支部支所
 の皆様方に格別のご高配を
 賜わり会員の増強、特に一
 人加入の見直しをお願いし
 て参りましたので今期末ま
 では相当の改善がなされ
 るものと存じます。

営委員会に付託しまして検
 討して頂たくようお願いし
 てあります。
 三月には予算総会が予定
 されておりますが、世界情
 勢、特にアメリカの政治経
 済情勢が昨年末に予想され

皆様の御健勝と、
 皆さんの、皆さんによる、
 皆さんの為の共済会として
 当会へよせられます益々の
 御協力をお願い申し上げます。
 して新年のご挨拶といたし
 ます。

しかし一方では公定歩合
 の引下げに伴う住宅ローン
 の利息低下等、減りつつあ
 る住宅建設に、僅かながら
 も灯りが見える状況もあり
 ます。吾々は電気工事の仕
 事を投げ出す訳にはいきま
 せん。今ここを乗り切らな
 ければならないのです。

新年のごあいさつ

中部電力株式会社
取締役 津支店長 太田 四郎



新年明けましておめでと
うございます。

皆様方には、お元気に新
春を迎えられた事と心から
およろこび申しあげます。

また旧年中は、当社の事
業運営につきまして、格別
のご支援とご協力を賜り厚
く御礼申し上げます。

顧りみますと、昨年は、
「電気工業業組合創立
二十周年」ならびに「電気
工事協力会創立四十周年」
を迎えられ、業界発展を祝
し記念式典を盛大に開催さ
れる等、誠に記念すべき年
であったと存じます。

ここに、長年にわたり築
かれました輝かしい業績に
対して心から敬意を表する
次第であります。

また、この記念すべき大

会において、当社芦浜原子
力発電所建設計画に対し、
推進協力決議を満場一致で
いただきました。

さらに七月には、三重県
知事ならびに県議会議長に
対し、芦浜推進に関する要
望書を提出される等、積極
的なご支援を賜り、意を強
くし覚悟を新たにされた次第
であります。協力会員皆様
の心強いご支援に対し、深
く感謝を申しあげます。

さて、昨年の経済動向は
急激な円高の影響をうけて
輸出依存型産業を中心に、
生産活動が低迷するなど、
産業界は大きな打撃をうけ
ました。

電力会社にとりましても
画期的な年でありました。
為替レートは最高の円高を
記録し、年初から下落傾向
にありました原油価格はバ
ーレル当り十ドル台を記録
するとう、四十八年以來
の安値となり昨年六月、ま
た本年一月から向こう一年

間と二度にわたり「電気料
金の暫定引下げ」を実施さ
せていただいております。

引下げの幅は全国最高とな
りましたが、この原因は電
源構成の石油依存度が高く
外的要因に左右されやすい
脆弱な企業体質を象徴した
もので、先行きの経済情勢
の不透明さを考えますと決
して安定しているとは言え
ず、今後も電源の多様化・
負荷の平準化等、格段の企
業努力に努めなければなら
ないと考えております。

当支店管内の電源開発に
つきましては、尾鷲三田火
力発電所三号機の工事が本
年六月運開を目指し順調に
進んでおり、一方、北勢地
区の火力建設工事、川越火
力線の着工、さらには地中
線化工事なども皆様方のご
尽力により着実に進んでお
ります。

さて新しい年六十二年を
展望しますと、景気は物価
の安定による消費の拡大を
はじめ、非製造業を中心と
する設備投資の着実な伸び
に支えられ、ゆるやかに回
復に向かうものと期待され

ますが、電力需要は素材型
から加工型への産業構造の
転換等を反映し、長期的に
みても高い伸びは期待でき
ず、負荷率は悪化の傾向に
進むものとおもわれます。

このような情勢にあつて
当社の最大の課題は、脆弱
な企業体質の改善にありま
す。この企業体質を一日も
早く改善するにはバランス
のとれた電源開発を進める
必要があり、それには現局
面を打開し「芦浜立地」の
早期実現しかありません。

今後も総代会のご決議に
お応えできるよう全従業員
が全力を傾注してまいり所
存でございます。

昨年にも増してご支援と
ご協力をお願いいたしま
す。

次に電力需要面からは、
エネルギーの競合・選択時
代を迎えた今、「需要開拓
・負荷平準化策」は、電源
立地と並ぶ重要課題であり
ます。

特に、深夜電気温水器に
つきましては、五十八年か
ら普及拡大に取組んでおり
ますが、依然として契約口

数はマイナス基調にありま
す。

深夜負荷の造成は、供給
設備の利用率を高め、コス
ト抑制による電気料金の長
期安定につながるため、本
年も全従業員をあげて推奨
活動を推進してまいります
ので、従来以上に皆様方
のご支援を賜りますようお願い
申し上げます。

本年はこの三重の地に電
灯が灯って丁度九十年目と
なる記念すべき年に当たり
ます。

『三重の電気九十年―新
しいこと電気から』をキャ
ッチフレーズに、お客さま
のニーズにお応えし、地域
発展にお役に立つよう各種
行事を計画しております。

ご支援・ご協力をいただ
きますよう、よろしくお願
い申し上げます。

最後になりましたが、皆
様方におかれましては「う
さぎの年」にふさわしく、
「飛躍の年」となりますよ
う、ますますのご発展と、
ご健勝を祈念いたしまして
新年のご挨拶とさせていただきます。

式年遷宮のはなし

伊勢支部 後藤 玲子

二、〇〇〇年の歴史を持つ伊勢神宮。そこで一、三〇〇年間守り続けられてきた超スケールのセレモニー。昭和六十八年十月には二十年に一度の式年遷宮が行われます。

「伊勢へ行きたい、伊勢路がみたい、せめて一生に一度でも」と、伊勢音頭に歌いつがれてきたお伊勢さんは古くから「心のふるさ

と」として多くの人に親しまれてきました。

「お伊勢さん」と呼ばれる伊勢神宮は正式には、「神宮」といい、皇室の祖、天照大御神をお祀りする内宮と、産業の神様である豊受大御神をお祀りする外宮を中心に、別宮、摂社、末社、所管社と合わせて百二十五社の総称です。神苑には樹齢八百年にも

及ぶ杉が尊厳に林立するなか、「唯一神明造」の社殿が、古来の建築美を伝えて

います。神宮には、内宮、外宮の両殿舎と別宮を二十年毎に造りかえ、神座をうつす「式年遷宮」という大祭典があります。持統天皇の世に第一回の式年遷宮が行われ現在に至るまで六十回に及んでいます。次の「式年遷宮」は昭和六十八年十月の予定で現在、準備が着々と進められています。

この遷宮とは、新しい神殿を造り、そこに神様のお遷りを願うこととです。式年とは定めのことというので、一、三〇〇年前に天武天皇により定められました。ではなぜ二十年で新しくするのでしょ

うか。昔から二十年を満数とい



って二十年経てばすべては初めに帰り新しくなるという考え方があり、二十年は時代の大きな区切りです。そして何よりも神宮の社殿は二十年も経てば、清々しさが失われて来ます。尊厳なお姿を拝するには二十年が限度といわれ、また技術者が「匠」の技を次代に伝承するのも二十年がふさわしいといえましよう。

内宮、外宮の両正殿と、東西宝殿、御饗殿、外幣殿、四丈殿、宿衛屋などの殿舎、これらを囲む四重の御垣と御門、そして十四ヶ所もの別宮までが新しく建て替えられます。また鳥居や橋も新しくなります。

さらに御太刀、御弓、楽器、織機具などの御神宝類、神様がお使いになる御衣、御櫛などの御装束類の数々、この二、五〇〇点にも及ぶ調度品も、当代最高の美術工芸家によって作り替えられ新しくなります。

御装束とは「飾りたるること」で、神座や殿舎の鋪設品、服飾品、遷御の儀に用いる品々を総称し、神宝とは神々の為の調度品で、紡績具、武器、馬具、楽器、文具、日常用品に大別できます。

これらの調度品は御正殿に納められ、次回の遷宮の折、撤下されますが、大部分は神宮で大切に保存され、一部は神宮徴古館に展示されます。

神宮の神殿は東と西に同じ広さの宮地があり、二十年毎に同じ姿の殿舎が建て替えられます。これは世代を引き継いで毎年稲が同じ形で稔り、生物が親と全く同じ姿で生まれ変わること、それぞれ個体の永遠の命を維持するのと同じ自然な心ばえなのです。

最も古い建築が苔むした姿ではなく、常にはじめのスタイルのままという時代でも存在するというこの発想と、文化の伝承の方法は世界のどの国にもみられない素晴らしいものです。

この偉大な発想には拍手喝采です。ピラミッドやパルテノン神宮に比べて伊勢の神宮は、今日もいきいきと存在しているのです。

温水器セールで大きな成果と自信

鈴鹿地区 出口 昭 義

鈴鹿電気工事事業協同組合 十周年記念「電気温水器大謝恩セール」を県下の組合では、はじめての試みとして、中部電力鈴鹿営業所の御協力と、三菱・東芝・日立・松下・ユパック五社の協賛を得て盛大に去る十月四日～五日の二日間、組合員と中電職員の全員で大売出しを実施した。

石油ポイラー等におおさら日々に契約の減少をたどっている電気温水器になんとか歯止めをかけ、普及に全力を上げ、ひいては業界の発展につながるものとして、チラシを二、五〇〇枚

作成、組合員は新築の家庭を、中電職員は既設契約の需要家と新規見込需要家と、手分けして訪問PRの結果、二日間に御来場いただいたお客さまは約二五〇名の多数となった。

会場は中電・鈴鹿営業所構内の屋外にテント村をつくり、各社ごとに温水器を展示、その他料理実演コーナー、コーヒー、湯茶の接待と従来の温水器とマイコン

型の温水器の電気料金の差をコンピューターで即時計算して、お客さまにご納得いただく方法など、ふだんペンチを持つ手にペンフレットをかかえ、一生懸命に折角来ていただいたお客さまを逃がしてはならずと、電気温水器の長所を説明、売り上げに努力。

このように貴い汗を流した結果、当日契約いただいた温水器四十九台、契約見

込み二十台と、すばらしい売り上げで大成功。

組合では頭初計画では、正直こんなにたくさん台数は売れるとは思っていませんでした。なにごととも一致協力してやればできるということ、今さらながら皆んなが身をもって体験したものである。

どうか他地区でも実施して見て下さい。

絶対売れるものです。



志摩の味「てこねずし」

鵜方地区 三井 徳 男

「てこねずし」は、志摩地方の郷土料理の一つである。とりたての魚の切り身を醤油につける。すし飯に入れる。それをまぜる。単純な料理である。

「てこねずし」の由来は、その昔、志摩の漁師が沖に出て、狭い舟の上の忙しい仕事の合間に獲れた魚を切り身として、手早く食事をするため「いちいち醤油につけながら食べるのは面倒だから、まとめてつけてしまい、ご飯は日持ちするよう酢をうっておこう」といっ

つそうのこと両方を手でこねて混ぜてしまい食べたのがはじまりといわれ、海に生きる人々の生活の智慧から生れた素朴な味といえましょう。今ではたれやすし飯にいろいろと味加減が凝らされ、祭や婚礼などの祝い事に、遠来の客のもてなしに、この地方ではなくてはならない料理の一つである。

そして、その素朴な調理法と独特の味が口づけて広まり、志摩地方の旅館や食堂などでも、味わうことができるようになった。

志摩半島の最南端、四季、

魚市場に生きのよい魚が絶えない志摩町は、「てこねずし」のふるさとである。

木の香りの残る半切りオケに入れられたすし飯に、たれかつ取り出したばかりのつやのある切り身が色よく調和して、思わず食欲をそそられる。材料の魚は、カツオ、タイ、アジと旬のもの、もちろん獲れたばかりの新鮮な活きのよさが勝負である。

奥志摩の自慢できる漁師の味「てこねずし」をみなさんもぜひ一度訪ねて下さい。

「旧東海道」探訪

鈴鹿峠・関宿見聞記

事務局 大矢 善 勇

へ坂は照る照る、鈴鹿は曇る、あいの土山雨が降る

……鈴鹿馬子唄に歌われる鈴鹿峠からふもとの風情を訪ねようと昨年5月、曇天ではあったが、何とか一日雨はなさそう……との天気予報に出発、亀山駅より国鉄バスにて「鈴鹿峠」で下車。

交通量の多い一号線から横断歩道橋を渡り旧東海道（自然歩道）へ入る、このころ歌の文句ではないが少し小雨が降り出し一面「モヤ」が立ち始める、風雨にさらされ崩れかけた急坂、苔むした石垣等往時の苦勞が偲ばれる、頂上にたどり着くと今は一面の茶畑の一角に三重県と滋賀県の県境標識とともに「鈴鹿馬子唄」で名高い峠の由来が書かれ、東の箱根とともに東海道の難所の一つであった。現在は丁度この峠の真下が国道一号線のトンネル

であり自動車でも楽に越すことができる。

この峠道から少し脇道に入ったところに県の天然記念物に指定されている、奇岩「鏡岩」がある。

昔、山賊が街道を通る旅人の姿を岩肌に写して危害を加えた……とのいわれがある。

この峠を起点に再び坂を

下り旧東海道を訪ねることとし、まず国道の直下に位置する式内社「片山神社」を参拝、坂下宿へ……幸い小雨もあがる。

坂下宿のおもかげ

関の宿とともに東海道五十三次の一つである坂下宿、昔は一〇〇軒にもおよぶ宿屋、本陣も四軒あったといわれる、その本陣跡地が部落の中心地であり、今は茶畑となっているがその敷地の広大さから盛況であったことがうかがえる。

今も馬つなぎの環、連子格子が残る古い家並が数多く残っている。

坂下宿をあとに沓掛を経由、鈴鹿川沿いに下るとやがて有名な筆捨山が左手に大きく姿をあらわす。

筆捨山を望む

全山怪石、奇岩が多く、松・



坂 之 下 (筆捨山)

楓・つつじが繁茂している。昔狩野法眼元信という画家があまりにも山の変化が激しいため描くことができず筆を捨てて嘆いたので筆捨山という名がついたといわれ、有名な「広重」の東海道五十三次の49番「坂の下」の画もこの筆捨山を描いている。

連なる観音山・羽黒山・関富士などの景観を仰ぎ見ながら、旧東海道屈指の宿場町として栄えた関町へたどりつく。

江戸時代には東海道・伊勢別街道・大和街道の分岐点として、本陣・脇本陣・旅籠などが軒を連ねた宿場町である。

西の追分には大きな道標が建てられている。豊かな観光資源・文化遺産を残そうと「町並み保存」に積極的に取り組んでいる大きな立看板が整備されている。この説明板、由来書きにより街並に入ると、それぞれ先人の遺産保存のための説明板が掲げられている。現在もその子孫が生活しながらの保存整備であり、往時を今に伝える唯一の文化遺産である。

また町並み保存のための対策として改築する場合でも昔のおもかげを残そうと連子格子等、古き良きものが目立つ街並みの連続である町内の旧東海道は約二㎞あり名所旧跡も多い。

仇討の烈女小万の碑
亡父の仇討を果し烈女といわれた「関の小万」の碑、志の半ばで倒れた母の遺思を継ぎ、三年間の道場通いの末、天明三年（一七八三年）、十八才の若さで本懐を遂げた小万の話は、いまも語り草となっている。

碑は東の追分近くに、墓は地藏院近くの福蔵寺境内にある。

またこの寺は天正十一年（一五八三年）神戸城（鈴鹿市）主の織田信孝の家老が信孝をとむらうため、菩提寺として建立されたと伝えられる。

安産と高売繁盛

「関の地藏さん」で親し

まれている地藏院もこの街並沿いにある。

天正十三年(七四一年)

天然痘に苦しむ民衆を救うため、僧・行基が地藏尊一体を彫って安置したのが起りの由緒ある寺。

境内には鎌倉時代の遺風を残す愛染堂(国指定重要文化財)、亀山城主が寄進した梵鐘があるほか、藤原定家が「えぞすぎぬ、これや鈴鹿の関ならん、ふりすてがたき花のかげかな」と詠んだ、県内七名園の一つの庭園がある。安産・商売繁盛のご利益があると、県内外からのお参りの人は多



関本陣早立

いといわれる。

東国への重要な関門

関はまた古代三関の一つとして知られ、岐阜県・不破の関、福井県・愛発(あちら)の関とともに交通の要衝だった。都が大和にあったときは加太越えの大和街道が、平安京に移ってからは鈴鹿峠への東海道がいずれもこの地を通過しており、東国への重要な関門であった。

また街並の東の端には東の追分けがあり大きな鳥居が建っている。伊勢別街道の分岐点としても伊勢参宮への思いをこめた追分風景であり、この鳥居は伊勢神宮の遷宮による用材で建てられている由緒ある立派なものである。

県境の鈴鹿峠から約15km程、すぐれた街道が往時全盛であったとは……現地を歩いて見てあらためて発見した思いで関西本線関駅から帰途についた。

用語解説



コンピュータ相互間、あるいはコンピュータと端末機間を通信回線で結んでデータを送受する通信。そのはじまりは、一九五八年、米軍が対空レーダー網と管制センターを通信回線で結んで、侵入する飛行機やミサイルをいち早く察知するために開発したシステムだといわれている。わが国では、電電公社が四三年一〇月に全国の地方銀行を結んで「為替用デー

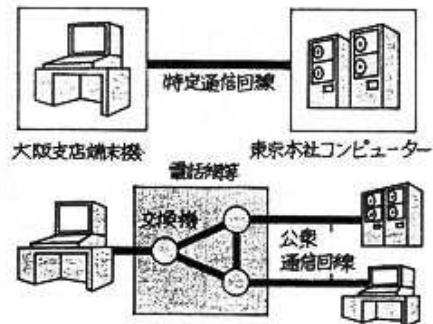
タ通信サービス」を始めたのが最初。

NTTは現在、利用者が指定する区間に専用の直通回線を設置する「特定通信回線サービス」|| 月額固定料金制で大量データ伝送の場合に経済的と、電話網やテレックス網の回線を利用する「公衆通信回線サービス」||

データ通信

公衆通信網に接続された他のコンピュータや端末装置とも通信が可能で、一つの端末装置を各種のシステムに共用できる、がある。

NTTのサービス以外の身近なデータ通信の例としては国鉄一緑の窓口の予約業務、銀行間の為替データを交換する「全国銀行システム」、預金口座の残高照会などを可能にする「音声照会通知システム」、「現金自動支払システム」、「航



空券予約・発行システム」などのほか、市役所の公害監視システム、交通信号の制御システムなどがある。「データテレホン」は、従来のプッシュホンとして、リダイヤル、ダイヤル番号表示、オンフックダイヤル、スピーカー受話のほか、磁気カードによるダイヤル機能やデータの入出力機能を加えた多機能プッシュホン。

デジタル専用線を中心にTNetが提供する専用線サービスにおいても、コンピュータ間通信やデータ伝送が、画像伝送やTV会議などとともに主要な用途となり、二ルート化によるすぐれたバックアップ体制が大きなメリットとなる。

(電気新聞より転載)

富田地区

事務所移転のお知らせ

富田地区事務所は去る12月11日よりつぎのとおり、移転いたしました。

新「事務所」所在地

四日市市天ヶ須賀三丁目
五―一五番地
電話
〇五九三六四七〇三五
(電話は従来どおり)

電話工事担任者試験

受験予備講習会について

電話工事の解放に伴い、一昨年から実施されている工事担任者試験についてはすでに自己研修により資格取得済みの会員も増加しつつあります。

願います。

記

講習内容

アナログ三種受験を主体とした基礎理論と応用

講師

松下電工(株) 社員

日程および会場

- 62・2・3(火) 桑名会場
 - 62・2・6(金) 四日市会場
 - 62・2・9(月) 伊勢会場
 - 62・2・12(木) 津会場
- 時間はいずれも9時~16時

受講料

テキスト代

四、五〇〇円

細部は各事務局へお問合せ下さい。

総合発注の問題点

分離発注促進シリーズ ⑤

現代の建物が昔に比べて随分りっばになったことは冒頭で述べたとおりですが、その最大の原因は、従来の構造と意匠だけの建物に「健康と快適さ」という画期的な「設備システム」がプラスされるようになったからです。

建物の本質的な変化にもかかわらず、旧態依然とした現状の施工体制(建築業者が設備システムも統括する)では健康で快適な建物を完成させることは困難です。

おおかたの建築業者は、ともすれば設備という、技術の異なる分野に対し、理解が薄く建築工事の方を設備工事よりも優先させがちになります。そのため工程的にも機能的にも設備工事に無理が生じる恐れが出てきます。

また建築業者は元請という立場で、設備業者を常に下請として施工させているのが現状です。

さらには工事代金の支払などにおいても、設備業者に不利な条件を強いる場合もしばしばあります。

こうしたことから、設備業者が特性を生かして工事ができるよう別個に受注することが必然的な最良の条件とされつつあります。

